



Title	バウムガルテンはなぜ詩学・レトリックを美学のモデルとしたか : 「感性的認識の学」という美学の定義をめぐって
Author(s)	井奥, 陽子
Citation	弁論術から美学へ : 美学成立における古典弁論術の影響. 2014, p. 48-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54560
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

バウムガルテンはなぜ詩学・レトリックを美学のモデルとしたか

——「感性的認識の学」という美学の定義をめぐる——

井 奥 陽 子

序

哲学的学科としての美学は、18世紀半ばにバウムガルテン（Alexander Gottlieb Baumgarten, 1714-1762）によって創始された。バウムガルテンは、ハレ大学に提出した学位論文『詩にかんするいくつかの哲学的省察』（1735年、以下『哲学的省察』）において、初めて「美学」という名称を用いた。そして1742年にオーダー河畔のフランクフルト大学にてドイツ語で美学講義を行い、その講義をもとにラテン語で『美学』（第1分冊1750年、第2分冊1758年、未完）を執筆した。

『美学』は、詩学およびレトリックから強く影響を受けたものであった。他方、バウムガルテンは同書で美学を「感性的認識の学（scientia cognitionis sensitivae）」と定義する（AE 1）。従来はこの定義から、バウムガルテンの美学は本来、感覚能力や想像力といった下位認識能力（*facultas cognoscitiva inferior*）と、その能力によって得られる感性的認識とを主題とすべきであった、と理解されてきた。そのため、認識論という定義と詩学・レトリックという内容とのあいだに齟齬が生じていると思われる。同時代人のヘルダー（Johann Gottfried Herder, 1744-1803）やズルツァー（Johann Georg Sulzer, 1720-1779）による指摘をはじめとして¹⁾、今日に至るまで、バウムガルテンは定義に反して感性的認識を美学で扱わなかったと語られてきた。そしてこのことが一因となって、美学史上バウムガルテンは、美学のたんなる命名者として位置づけられてきた。

カント（Immanuel Kant, 1724-1804）以前の講壇哲学者として長らく顧みられなかったバウムガルテンだが、ヴォルフ（Christian Wolff, 1679-1754）の思想をカントへ伝えた人物として、20世紀半ばから再評価の機運が高まった。今世紀に入ってからようやく、『美学』と『形而上学』（1739年初版）のドイツ語への全訳がなされ²⁾、また初のバウムガルテン国際会議が開催される³⁾など、「バウムガルテン・ルネッサンス」⁴⁾は現在も継続している。美学研究においてバウムガルテン・ルネッサンス

1) Herder, Johann Gottfried. *Kritische Wälder, oder Betrachtungen über die Wissenschaft und Kunst des Schönen*, Wäldchen 4, Riga, 1769, S. 14-25; Sulzer, Johann Georg. *Allgemeine Theorie der schönen Künste*, Bd. 1, Leipzig, 1771, S. 48.

2) *Ästhetik*, 2 Teile, übersetzt von Dagmar Mirbach, Hamburg, 2007; *Metaphysica/Metaphysik*, übersetzt von Günter Gawlick und Lothar Kreimendahl, Stuttgart, 2011.

3) 2007年3月23-25日に、IZEA（Interdisziplinäres Zentrum für die Erforschung der Europäischen Aufklärung）の主催でハレ大学にて開催された。テーマは「アレクサンダー・ゴットリープ・バウムガルテン——合理主義哲学における感性的認識（Alexander Gottlieb Baumgarten – Sinnliche Erkenntnis in der Philosophie des Rationalismus）」で、発表者はドイツとイタリアからの参加者が中心であった。

4) Schwaiger, Clemens. *Alexander Gottlieb Baumgarten, ein intellektuelles Porträt*, Stuttgart, 2011, S. 16.

が開花したのは、美学を感性論として捉え直そうとする動きが80年代から生じたことに多くを負っている。バウムガルテンによる「感性的認識の学」という定義がしばしば、美や芸術に限定されない感性論としての美学を提唱する、その根拠とされるからである⁵⁾。しかし感性論の側からの研究は、現代美学の一方向としては有益であろうが、バウムガルテンの美学を十分に捉えられているとは言い難い。とりわけ、「感性的認識の学」としての美学の中核がなぜ詩学・レトリックだったのかという、バウムガルテン美学の根本的な問いに答えることはできない。

本稿はこの問いに答えるために、「感性的認識の学」という定義は何を意味しているのか、またどのように定義されるバウムガルテンの美学は下位認識能力そのものの分析を主題とすべきなのか、という点について吟味する。それによって、バウムガルテンの美学における定義と内実との齟齬が見かけ上のものであることを示したい。本稿は4つの節からなる。まず美学が成立した背景について、第1節では下位認識論という点から、第2節では詩学・レトリックという点から、ヴォルフのテキストにも目配りしつつ整理する。そのうえで、第3節では、論理学や心理学との関係から美学の役割について考察する。第4節では、『形而上学』における美学の定義について検討する。

1. 下位認識能力の論理学としての美学の誕生

美学はバウムガルテン個人の独創によって生まれたというよりも、むしろヴォルフ学派の哲学体系が要求したものであった。

ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716) の哲学を体系化した啓蒙合理主義者として知られるヴォルフは、敬虔主義やトマージウス (Christian Thomasius, 1655-1728) 学派と対立しながらも、ハレ大学やマルブルク大学で活躍し、講壇哲学において大きな影響力を持っていた。その哲学体系は、『哲学一般についての予備的叙説』(1728年初版、以下『哲学叙説』)において次のように定められる。哲学の主要な部門は、神について論じる自然神学、人間の魂 (anima) について論じる心理学、物体について論じる自然学、という3つである (DP 56-59)。自然神学と心理学に存在論と宇宙論 (cosmologia) を加えた4部門が、形而上学と呼ばれる (DP 79)。さらに、形而上学と自然学の他に、「真理を認識するさいに認識能力を導く (dirigo) 学」としての論理学 (DP 61) と、「善を選び悪を避けるさいに欲求能力を導く学」としての実践哲学 (DP 62)、すなわち倫理学、政治学、家政学、自然法学 (DP 68) とがある⁶⁾。そしてヴォルフは自然学の下位部門などを列挙した後、「まだ我々に知られていない哲学的学科が数多く存在している」と付け加える (DP 86)。

論理学は認識能力を導く学とされた。だがここで認識能力という語が示すのは、上位認識能力、とりわけ知性 (intellectus)⁷⁾ である。ヴォルフの論理学のおもな主題は、アリストテレス＝スコラ哲

5) e. g. Welsch, Wolfgang. *Ästhetisches Denken*, Stuttgart, 1990 (『感性の思考——美的リアリティの変容』小林信之訳、勁草書房、1998年); Böhme, Gernot. *Asthetik, Vorlesungen über Ästhetik als allgemeine Wahrnehmungslehre*, München, 2001 (『感覚学としての美学』井村彰・小川真人・阿部美由起・益田勇一訳、勁草書房、2005年); cf. Schweizer, Hans Rudolf. *Ästhetik als Philosophie der sinnlichen Erkenntnis*, Basel/Stuttgart, 1973.

6) 正確には、倫理学、政治学、家政学の3つが実践哲学と呼ばれ、自然法学は実践哲学の理論としてそれらと区別されるが、自然法学も実践哲学の各々の分野のなかで論じられる (DP 68)。

7) 知性は、ヴォルフにおいてもバウムガルテンにおいても、判明に認識ないし表象する能力と定義される (PE

学の伝統的論理学と同様に、概念（*notio, conceptus*）、判断（*iudicium*）、推理（*discursus, ratiocinium*）であるが⁸⁾ (cf. AL 14)、この3つは知性の作用とされるのである。

知性の働き（*operatio*）（通常は精神（*mens*）の働きと呼ばれる）は3つあり、それらによって我々は認識されるものに関わる。すなわち、単純把握（*apprehensio simplex*）による概念、判断、そして推理である。（PE 325; 原著の強調は省略）

論理学は知性を導く学であり、つまり下位認識能力を導く学は欠けていた。ヴォルフの「ドイツ語論理学」と呼ばれる著作の表題が、『真理の認識における人間知性の諸力とその適切な使用とにかんする理性的な思考』であることも、そのことを示している。なお理性（*ratio*）は、バウムガルテンの定義では「事物の連関を見通す（*perspicio*）知性」であり（MT 640）、したがって知性のうちに含まれる。3つの知性の作用のうち、理性はとくに推理に関わる（cf. MT 646）。哲学用語のドイツ語訳に功績のあったトマージウスは、論理学を「理性論（*Vernunftlehre*）」と呼び⁹⁾、バウムガルテンも *logica* の訳に同様の表記を用いる（AL 7）。

さて、論理学が認識能力のうち知性のみを導く学であることに着目したのは、ヴォルフに直接教えを受ける機会のあったビルフィンガー（Georg Bernhard Bilfinger, 1693-1750）であった。彼は、ヴォルフの哲学を解説および擁護した『神、人間の魂、世界、事物の一般的な特性についての哲学的解明』（1725年、以下『哲学的解明』）のなかで、次のように記した。

かの優れたアリストテレスが「…」知性にかんして成し遂げたことを、感覚する能力、想像する能力、注意する能力、抽象する能力そして記憶力にかんして成し遂げるような人々が現れてほしいものである。アリストテレスが「オルガノン」において論理学ないし論証する能力を秩序づけたように、これらの能力をその使用（*usus*）において導き助ける（*dirigo et juvo*）ことに役立つすべてのことを、諸技術のかたちにもたらすためである。（DL 268）

アリストテレスのオルガノンが知性を体系化したように、想像力などの下位認識能力¹⁰⁾についても、その使用に役立つことがらを規則化し、秩序づけることが望まれる。バウムガルテンが美学を構想したのは、ビルフィンガーによるこの指摘がきっかけであった。『美学』冒頭では、『哲学的解明』の上記引用を含む箇所への参照指示が記される（AE 11）。さらに講義録では、ビルフィンガーの発言が『哲学的省察』を執筆する直接の契機となったということが明記されている。なおこの講義録は、

275; MT 402)。だが上位認識能力に関しては、ヴォルフが知性の他に注意（*attentio*）と反省（*reflexio*）を挙げる（PE 234; 266）のに対して、バウムガルテンは知性を上位認識能力と同義とみなす（MT 624）。ただしバウムガルテンにおいて、広義の知性は認識能力と同義である（MT 519）。

8) ヴォルフの『合理的哲学あるいは論理学』（1728年）は、理論編と実践編とに大別され、概念、判断、推理は理論編で扱われる。実践編では、論理学の様々な効用について説かれる。

9) e. g. *Einleitung zu der Vernunft-Lehre*, Halle, 1691; *Ausübung der Vernunft-Lhere*, Halle, 1691.

10) バウムガルテンの『一般哲学』（1770年）においては、注意と抽象も下位認識能力のうちに加えられる（PG 147）。ヴォルフは注意を上位認識能力に加える。註7参照。

1750年頃に『美学』を教科書にして行われた講義が学生によって採録されたものであり、20世紀に入ってから発見された。

ビルフィンガーは『解明』のなかで、感性的認識についての規則をよりよく知りたいと、そして感性的認識がいつそう促されることを願った。この要望が、この学 [= 美学] の土台である『詩にかんするいくつかの議論 [= 哲学的省察]』を執筆する機会を、バウムガルテン教授に与えた。(KN 70, 1)

『哲学的省察』は、詩学を合理哲学と結びつけた「詩的哲学 (philosophia poetica)」を試みる論考であった (MD praefatio)。そして美学はこの「詩的哲学」をもとにして、その領域を詩から感性的認識へと広げることによって構想される。『哲学的省察』の終盤から引用する。

第9項より、詩的哲学とは感性的な言論を完全性へと導く学である。ところで、我々は話をするさいに感性的な言論の表象を持っており、その表象を伝達するから、詩的哲学は、詩人における下位認識能力を包摂する。事物を感性的に認識するさいに下位認識能力を導くことはたしかに、一般的な意味での論理学によるものであろう。しかし我々の論理学について知っている者なら、いかにその領域が開拓されていないか、気づかないことはないだろう。もし、実際にこのかなり狭い境界のなかに制限されている〈論理学〉が、その定義によってさえこの境界へ追い立てられた場合、哲学的に或るものを認識する学あるいは真理を認識することにおいて上位認識能力を導く学とみなされるのではないだろうか。[...] 心理学は強固な原理を与えてくれるから、下位認識能力を導く学あるいは感性的に或るものを認識する学が与えられうることを、我々は誰も疑わないだろう。(MD 115)

詩的哲学は、感性的な言論を完全性へ導く学である。感性的な言論は下位認識能力のはたらきによって伝達されるから、詩的哲学は、認識能力を導く学としての論理学に属するはずである。だが論理学は、実質的には上位認識能力を導く学であった。そこでバウムガルテンは「下位認識能力を導く学」を提唱する。そしてこの学を美学と名づける (MD 116)。

美学はこのようにして、論理学の不備を補うために、そして論理学との類比をとおして創設された。そのため、バウムガルテンは美学を「下位認識能力の論理学」とも言い表し (MT²⁻⁷ 533)、論理学を美学の姉とも呼ぶ (AE 13)¹¹⁾。

2. 普遍的詩学・普遍的レトリックという構想

美学はまず「詩的哲学」あるいは「普遍的詩学」と「普遍的レトリック」を中心として構想された。前述のとおり、バウムガルテンは自らの美学の土台である『哲学的省察』を「詩的哲学」と呼んでい

11) ただし、理論においては論理学が姉だが、実践 (Ausübung) においては美学が姉とされる (KN 97, 13)。

た。また『形而上学』の初版には、次のような記述がある。

感性的に認識することと叙述することの学（*scientia sensitive cognoscendi et proponendi*）は、〈美学〉である。思考および言論を感性的に認識することと叙述することの学は、より小さな完全性をねらう〈普遍的レトリック（*rhethorica universalis*）〉か、あるいはより大きな完全性をねらう〈普遍的詩学（*poetica universalis*）〉である。（MT¹ 533）

感性的認識と感性的叙述については第4節で考察するが、ここでは、「普遍的詩学」と「普遍的レトリック」が美学の主要な下位部門として考えられていることが確認できる。なお引用文のうち、普遍的詩学と普遍的レトリックにかんする後半の部分は、第2版（1743年）以降では削除される。

バウムガルテンはこうした着想をどこから得たのであろうか。この点については、ヴォルフの『哲学叙説』に注目すべき記述がある。ヴォルフは哲学の諸部門について論じるなかで、従来の哲学では顧みられなかったものの、「技術の哲学（*philosophia artium*）」すなわち「技術論（*technica*）」ないし「技術学（*technologia*）」もありうると述べる（DP 71）。技術学は、技術および技術の所産について、その諸規則の根拠を説明する（*ibid.*）。たとえば、建築術と建造物とにかんする諸規則を学的に論じるならば、それは都市建築学（*architectura civilis*）となり、技術学のひとつに数え入れうる（DP 40 scholium; 71 scholium）。このように述べた後、さらにヴォルフは「自由学芸〔自由な技術〕の哲学（*philosophia artium liberalium*）」の可能性を提示する¹²⁾。

もし学の形式にもたらされるなら、自由学芸そのものの哲学が創設されうる。たとえば文法学の哲学（*philosophia grammaticae*）が与えられる。文法学の哲学では、ひとつひとつの言語の特殊な語法（*idiotismus*）にかんしては説明されないが、文法一般にかかわる普遍的な諸規則の根拠が明らかにされる。これまで用いられた呼び方によれば、哲学的文法学（*grammatica philosophica*）と呼ばれるだろう。ここから同時に、哲学的レトリック（*rhethorica philosophica*）や哲学的詩学（*poetica philosophica*）などが何を意味するか理解される。（DP 72）

文法学が個々の言語の語法について特殊的に考察するのに対して、「文法学の哲学」ないし「哲学的文法学」は、文法一般にかかわる諸規則を普遍的に考察する。詩学とレトリックについても同様に考えると、詩学やレトリックが詩や雄弁の特殊な規則を論じるのに対して、哲学的詩学や哲学的レトリックは詩一般あるいは雄弁一般にかんする普遍的な規則を体系化する。さらにヴォルフは、カンパネッラ（Tommaso Campanella, 1568-1639）がすでにこれら3部門について試みていたものの一般には無視されてきた、と記している（DP 72 scholium）。ヴォルフのこうした記述と、バウムガルテンの「詩的哲学」や「普遍的レトリック」という考えのあいだには、親近性がみてとれるだろう。ヴォルフが「自由学芸の哲学」の可能性を指摘したことが、詩学とレトリックを中核として哲学の新たな

12) 近代における *artes liberales* という語は、徐々に形成されつつあった芸術の概念を表すのにも用いられたが、ここでは文法学や詩学・レトリックが挙げられるから、ヴォルフは教育科目としての自由学芸の、なかでもとくに三学を念頭に置いているようである。

部門をつくることの示唆を、バウムガルテンに与えたのではないかと推測できる。

周知のごとく、詩学を含めたレトリックと文法学とは、古代末期から中世にかけて論理学ないし弁証術とともに自由学芸の三学を構成していた。またレトリックは古来、論理学との類比関係において捉えられてきた。たとえばアリストテレスは、「弁論術は弁証術と相応ずる関係にある。というのは、両方とも、扱う対象が或る意味で一般性がある、誰でも知ることができ、特定の専門知識を全く必要としない、といった類のものだからである」と述べ¹³⁾、説得推論の分析を中心に『弁論術』を著した。こうした伝統を鑑みると、バウムガルテンが論理学の妹として詩学およびレトリックを充てることは、自然な発想とも言える。

3. 「感性的認識の学」が意味するもの——心理学との関係

それでは、バウムガルテンの美学において、下位認識能力はどのように扱われるべきなのだろうか。美学は論理学との類比をとおして生まれたのだから、論理学が上位認識能力を導く学とされる意味をまず明らかにせねばならない。

山本は、17世紀半ばから18世紀末の論理学がもつ「形而上学的・認識論的・心理学的という特色」が、ヴォルフの論理学にも妥当することを指摘する¹⁴⁾。ヴォルフの論理学は存在論と心理学を前提とし、論理的思考は認識能力として理解される。そのため、記号や言語よりもそれらを規制する精神の作用に、つまり概念ないし観念に考察の関心が向かうのである。こうした特色は、バウムガルテンの論理学にも当てはまる。バウムガルテンの論理学にかんする著作には、ヴォルフの論理学をコンパクトにまとめた『論理学講義』（1761年）がある。この著作におけるバウムガルテンの定義では、論理学は「知性的認識を完全にする（perficio）哲学」とされる（AL 9）。また概念や判断や推理はすべて、表象として定義される。すなわち、概念は「思考している人における一つの表象」（AL 16）、判断は「互いに適合ないし対立するものとしての或る諸概念についての表象」（AL 117）、そして推理は「判断の真なる原理に由来する、判明な判断の表象」（AL 204）である。そして概念には、明瞭・曖昧、判明・渾然といった認識の分類がそのまま適用される（AL 18-19; 21）。

ヴォルフ学派の論理学が認識論的な特色をもつとはいえ、だからといって論理学において認識能力そのものが独立して論じられるわけではない¹⁵⁾。これはどういうことだろうか。この点については、ヴォルフの『哲学叙説』で次のように説明されている。

さらに、論理学は真理を認識することにおいて知性を導く仕方を示すのだから、真理を認識するさいに知性の働きを使用することについて教えねばならない。しかし認識能力がどのようなもの

13) 『弁論術』戸塚七郎訳、岩波文庫、2012（1992）年、22頁、1354a。

14) 山本道雄『カントとその時代——ドイツ啓蒙主義の一潮流』晃洋書房、2010年、12-14頁。

15) ゴットシェート（Johann Christoph Gottsched, 1700 - 1766）は「感覚能力（Empfindungskraft）」や「判断力（Urteilkraft）」といった見出しの節を論理学のなかに設けるが、その内容は概念（Begriff, notio）および命題（Satz, propositio）にかんするものであり、伝統的論理学における概念論と判断論に対応する（*Erste Gründe der gesamten Weltweisheit*, Leipzig, 1733, S. 13-25, 32-46）。

であり、またその働きがどのようなものであるかは、心理学から学ばれるべきである。したがってまた、論理学の規則の論証のためには心理学から原理が求められるべきであることは明らかである。(DP 89)

知性や知性の作用がどのようなものであるかということについては、人間の魂について扱う心理学において、とりわけ経験的心理学において論じられる。論理学は知性そのものではなくその作用の使用について、つまり真理の認識といういわば実践における規則を、心理学の原理を用いて論じるのである。論理学と心理学は、認識能力にかんしてこのように区分される。ヴォルフやバウムガルテンにとって、論理学が概念や判断や推理を教えるのは、認識にかかわるかぎりでの真理へと至るためである¹⁶⁾。そのため、論理学において上位認識能力そのものについて考察されずとも、論理学は上位認識能力を導くという役割を果たすことになる。論理学が上位認識能力について論じる学とは言われず、上位認識能力を導く学、あるいは知性的認識を完全に¹⁷⁾する学と呼ばれることにも、上記のような論理学と心理学との区分が示されている。

美学における下位認識能力についても、論理学と類比的に理解されるべきである。ヴォルフ学派において要請されたのは、下位認識能力をその使用において導く学であった。論理学が「知性的認識を完全にする学」であるなら、美学の「感性的認識の学」という定義は、感性的認識そのものを分析する学ではなく、感性的認識を完全にする学と言い換えられるべきである。下位認識能力やその作用そのものについて分析するのは経験的心理学の役割であり、美学の役割は、経験的心理学によって与えられた原理を用いて (cf. MD 115; AE 10)、下位認識能力にかんする実践における規則を論じることである。ところで、「感性的認識の完全性」をバウムガルテンは「美 (pule[h]ritudo)」とし、美を「美学の目的」とする (AE 14)。論理学では、誤謬を避けて真理へと至るために、(知性的) 判断や推理の規則を体系化することがなされる。それと同様に、醜を避けて美へと至るために、美学では詩や雄弁における規則を体系化することが重要だとバウムガルテンは考えたのであろう。

4. 感性的認識と感性的叙述の学

最後に、『形而上学』における美学の定義について検討する。第2節で触れたように、『形而上学』では、美学が「感性的に認識することと叙述することの学」と定義される (MT 533)。この定義は、初版から最後の第7版 (1779年) まで、つまり美学の講義や『美学』の出版を行うあいだも、変更がなされなかった。『形而上学』は、カントの形而上学講義で教科書として使用される (1755-1796年) など、バウムガルテンの著作のなかで当時もっとも広く読まれたものである。その『形而上学』で保持されたこの定義は、『美学』における定義と並ぶ、バウムガルテンの最終的な見解とみなしうる¹⁷⁾。

16) cf. 山本、前掲書、14頁。カントは一般論理学と超越論的論理学を区別することによって、近代の論理学から認識論的な性格を取り除いた。

17) バウムガルテンは美学の構想を世に知らしめるために、ドイツ語で「哲学書簡」(1741年)を著して雑誌へ寄稿した。その記事のなかでも、美学は「感性的認識そのものに主として携わる技術と、生き生きとした叙述 (lebhafter Vortrag) に主として携わる技術」とに区分される (PB 69)。なお proponere のドイツ語訳には

バウムガルテンの定義では、叙述とは「語 (vocabulum) をつうじて他のものにおいて思考を生み出すこと」である (AL 23)。語とは「人間の声 (vox) をとおして比較的よく使用される名辞 (terminus)」であるので (MT 350)、叙述とはつまり、通常の言葉によって人間が思考を表すことを意味する。

ではなぜ、『美学』では叙述という語が削除されたのであろうか。その理由は講義録に記されている。

感性的認識を獲得することと叙述することについての学 (scientia de cognitione sensitiva et acquirenda et proponenda) となぜ定めないのかと言われるが、しかし定義に不要な区分を持ち込んでではないという規則はよく知られている。さらに、説明は音楽や絵画をも示すものでなければならぬのだから、これだけではあまりに狭隘であろうし、はるかに狭く雄弁 (Beredsamkeit) を示してしまうだろう。叙述することの代わりに表示すること (significanda) とするよう提案しようとしても、それはすでに我々の定義に含まれている。(KN 71, 1)

叙述という語が棄却されたのは、叙述ではもっぱら雄弁において思考を表すことを示してしまうからである。音楽や絵画において表すことも示すためには、表示と言うのが適切である。だがバウムガルテンにとっては、叙述ないし表示という意味も、「感性的認識の学」という定義に含まれている。そのため、定義をできるかぎり簡潔にするために、叙述という語は美学の定義から削除される。このように、バウムガルテンは感性的叙述の学あるいは感性的表示の学という意味も「感性的認識の学」に込めているがゆえに、『形而上学』における定義も保持されえた。

いくつかの先行研究においては、感性的認識の学が下位認識論に、感性的叙述の学がレトリックを中心とした制作術に対応すると理解されてきた¹⁸⁾。たしかに、『哲学的省察』では「一般的レトリック (rhetorica generalis)」と「一般的詩学」が「叙述することについての美学の部分」として挙げられる (MD 117)。また遺稿出版された『一般哲学』(1742年頃執筆、1770年公刊)では、美学が感性的認識を扱う部門と記号法 (ars characteristica) の部門とに分けられ、前者は下位認識能力を対象とし、後者には語学や図像学、詩学・レトリックなどが属するとされる (PG 147)。こうした記述から、先行研究のように推測することも不可能ではない。しかしながら、第3節で示したように、下位認識能力そのものを分析するのは経験的心理学の役割であるから、「感性的認識の学」がもっぱら下位認識

Darstellen が宛てられるのが通例であるが、バウムガルテンの用語法では、Vortragen が proponere に対応するドイツ語である (AL 23; PG 249)。

18) たとえば F. Berndt は、感性的認識と感性的叙述の学をそれぞれ認識論とメディア (媒体) 論 (Medientheorie) とに対応するとみなし、バウムガルテン美学にはそうした「二義性」ないし「苦しい関係」が生じていると述べ、メディア論をレトリックとも言い換える (Berndt, Fraucke. *Poema/Gedicht, Die epistemische Konfiguration der Literatur um 1750*, Berlin, 2011, S. 12-16)。S. W. Groß は、認識と叙述がそれぞれ認識能力と創造的 (schöpferische) 能力を指すとし、後者には詩学・レトリックを中心とする技術としての美学が示されていると述べる (Groß, Steffen W. *Felix aestheticus, Ästhetik als Lehre vom Menschen*, Würzburg, 2001, S. 70-71)。また P. Bahr も、叙述という語はレトリックの伝統を参照していると述べるように、もっぱら感性的描出の学のみが制作術に相当すると考えている (Bahr, Petra. *Darstellung des Undarstellbaren, Religionstheoretische Studien zum Darstellungsbegriff bei A. G. Baumgarten und I. Kant*, Tübingen, 2004, S. 20)。

能力そのものを扱う学を示しているとは解しにくい。実際、『美学』はそのような二分法によって区分されていない。『美学』で下位認識能力が主題となるのは、「美的な人 (aestheticus)」すなわち「美しく思考しようとしている人 (pulc[h]re cogitaturus)」(AE 27)¹⁹⁾の自然本性 (natura) について論じた箇所 (AE 28-46) のみである。この箇所は、『美学』全体の904項のうちわずか19項目を占めるにすぎないし、内容の点でも、伝統的レトリックにおける優れた弁論家の育成にかんする記述と共通するところが多い²⁰⁾。したがって、感性的認識と感性的叙述の学について上記のように理解するならば、バウムガルテンは下位認識論と詩学・レトリックという『形而上学』で自らたてた区分を無視して、さらに『美学』では詩学・レトリックを下位認識論に従属させたにもかかわらず、美学で下位認識論を展開しなかったということになってしまう。そうして、美学の定義と『美学』の内容とのあいだには決定的な齟齬があり、詩学とレトリックを手本としたことはバウムガルテンの不幸であるといえざるをえなくなる。

R. Campe は上記の先行研究のような見解とは異なり、認識と叙述という対はレトリックにおける思考内容 (res) と言語表現 (verba) という対に由来すると述べる²¹⁾。伝統的なレトリックの理論では、弁論は思考内容と言語表現から成るとされる。そして発想、配列、修辭というレトリックの主要な部門のうち、おもに発想の部門が思考内容に、おもに修辭の部門が言語表現に関わる²²⁾。『美学』もこれらの3部門に対応して、発見論、配列論、記号論という3つの章に分かたれる。発見論は思考内容ないし思考 (cogitatio) を主題とする (AE 13; 18)。バウムガルテンにとって「思考」は「表象」と同義であり (MT 506)、「思考すること」は「表象すること」と言い換え可能である (MT 534)。そして表象は、認識の結果ないし作用を示す (e. g. MT 515)。よって、バウムガルテンの用語法では、思考は認識とも言い換えることができる。実際、発見論には「認識の美について」という主題が掲げられている (AE synopsis)。したがって、発見論の主題である思考内容が、感性的認識に対応するとみなしうる。他方、記号論は記号ないし表示作用 (significatio) を主題とする (AE 13; 20)。先に見たように、表示は叙述のより広い語であった。したがって、記号論の主題である表示作用が、感性的叙述に対応するとみなしうる。

以上のことから、感性的認識と感性的叙述は、伝統的レトリックにおける思考内容と言語表現とに対応すると考えることができる。つまり、感性的認識の獲得とは着想を得ることであり、感性的認識の叙述ないし表示とはその着想を具体的に表現することである。したがって「感性的に認識することと叙述することの学」とは、文芸や絵画や音楽などにおいて発想を得て表現することについての学を

19) 美的な人には、理論的な美的な人すなわち美学者 (e. g. AE 15, 49) と、実践的な美的な人すなわち制作者 (e. g. AE 11, 34) との2種類がある (cf. AE 122)。ただしその自然本性について論じられている美的な人は、詩人、弁論家、音楽家などが挙げられる (AE 34, 69) ように、実践的な美的な人である。

20) cf. Linn, Marie-Luise. "A. G. Baumgartens 'Aesthetica' und die antike Rhetorik", *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte*, 41/3, Halle, 1967, S. 424-443, S. 430.

21) Campe, Rüdiger. "Der Effekt der Form. Baumgartens Ästhetik am Rande der Metaphysik", hrsg. von Eva Horn, Bettine Menke und Christoph Menke, *Literatur als Philosophie – Philosophie als Literatur*, München, 2006, S. 17-34, S. 20.

22) 伝統的レトリックにおける思考内容と言語表現については、Lausberg, Heinrich. *Handbuch der literarischen Rhetorik, eine Grundlegung der Literaturwissenschaft*, Bd. 1, München, 1960, S. 140, 248をおもに参照した。

意味する。表現されるのは発見論で見いだされた着想であり、また着想が構成や表現よりも重要である（cf. AE 13）から、そのためバウムガルテンは感性的に叙述ないし表示することも「感性的認識の学」という定義に含まれるとみなすのであろう。

結 語

本稿では、「感性的認識の学」という美学の定義をめぐって考察し、次のことを確認した。第一に、「感性的認識の学」は〈感性的認識を完全にする学〉と言い換えることができる。美学は論理学との類比をとおして成立したのだから、「知性的認識を完全にする学」としての論理学が、認識的真理へと至るために、知性を使用すなわち推理の規則について教える学であるように、〈感性的認識を完全にする学〉としての美学は、美へと至るために、下位認識能力の使用について実践的な規則を教える学を意味する。認識能力やその作用について分析することは経験的心理学の役割であり、論理学や美学の役割ではない。第二に、「感性的認識の学」には〈感性的認識を獲得することと叙述ないし表示することの学〉という意味が込められている。認識と叙述は伝統的レトリックにおける思考内容と言語表現という対に由来するから、〈感性的認識と感性的表示の学〉としての美学は、文芸や絵画などにおいて着想を得て表現することにかんする学を意味する。第三に、美学は1730年代まで「詩的哲学」や「普遍的レトリック」を中核として構想されていた。ヴォルフが「自由学芸の哲学」の可能性を指摘したことや、古来レトリックが論理学と類比的に捉えられてきたことが、こうした構想に弾みを与えたと思われる。「感性的認識の学」という定義が上記のように理解されるならば、詩学およびレトリックを手本として美学を展開することは、美学の定義に反するものでは決してない。以上のことから、バウムガルテンの美学に定義と内実との齟齬は生じていないという結論が導かれる。

むしろバウムガルテンは、美学を詩学やレトリックよりも広範で普遍的な学とみなしていた（AE 5）。また1740年代の構想では、拡大鏡や拡声器といった感官を回復ないし拡張する道具や、さらには温度計などの実験器具についても美学において論じうると考えられていた（PB 72）。バウムガルテンの美学が有しうるこうした広い射程について検討するためには、バウムガルテンの美学が詩学やレトリックから継承したものと変更したものを個々に明らかにしていかなければならない。この点については今後の研究課題としたい。

文献表

本稿で引用した文献とその略号は、以下のとおりである。出典にかんしては項（§）数を示す。ただし「哲学書簡」は頁数を記し、「講義録」は頁数の後に項数を併記する。訳文中の（ ）は、原語を併記する場合以外は原著により、〔 〕は筆者による。また傍点は原著のイタリック、〈 〉内はスモールキャピタルである。バウムガルテンとヴォルフのテキストには、関連する項の参照指示が記されているが、これらは煩瑣を避けるため省略した。『形而上学』の諸版の異同にかんしては、次の文献を参照した。小田部胤久「バウムガルテン『形而上学』（第504-623節）原典批判」『神戸大学文学部紀要』17、神戸大学文学部、1990年、1-45頁。なお引用文の訳は筆者によるものだが、邦訳がある

場合は参照した。

- MD: Baumgarten, Alexander Gottlieb. *Meditationes philosophicae de nonnullis ad poema pertinentibus*, Halle, 1735, in: *Reflections on poetry*, translated by Karl Aschenbrenner and William B. Holther, Los Angeles, 1954. (『詩にかんするいくつかの哲学的省察』)
- MT: ——. *Metaphysica*, Editio IV, Halle, 1768 (1739), reprint: Hildesheim, 1963. (『形而上学』)
- PB: ——. “Philosophischer Briefe zweites Schreiben”, Frankfurt/Leipzig, 1741, in: *Texte zur Grundlegung der Ästhetik*, übersetzt von Hans Rudolf Schweizer, Hamburg, 1983, S. 67-72. (『哲学書簡』)
- PG: ——. *Philosophia generalis*, Halle, 1770, reprint: Hildesheim, 1968. (『一般哲学』)
- AE: ——. *Aesthetica*, Frankfurt a. d. Oder, 1750/58, reprint: Hildesheim, 1986. (『美学』松尾大訳、玉川大学出版部、1987年)
- KN: ——. “Kollegennachschrift”, in: Bernhard Poppe, *Alexander Gottlieb Baumgarten, seine Bedeutung und Stellung in der Leibniz-Wolffischen Philosophie und seine Beziehungen zu Kant*, Leipzig, 1907. (『講義録』)
- AL: ——. *Acroasis logica in Christianum L. B. de Wolff*, Halle, 1761, in: Christian Wolff, *Gesammelte Werke*, hrsg. von J. École et al., Abt. 3, Bd. 5, Hildesheim, 1983. (『論理学講義』)
- DL: Bilfinger, Georg Bernhard. *Dilucidationes philosophicae de Deo, anima humana, mundo, et generalibus rerum affectionibus*, Tübingen, 1725, in: Christian Wolff, *Gesammelte Werke*, hrsg. von J. École et al., Abt. 3, Bd. 18, Hildesheim, 1982. (『神、人間の魂、世界、事物の一般的な特性についての哲学的解明』)
- DP: Wolff, Christian. *Discursus praeliminaris de philosophia in genere*, Frankfurt/Leipzig, 1740(1728), in: *Christiani Wolffii Philosophia rationalis sive Logica*, *Gesammelte Werke*, hrsg. von J. École et al., Abt. 2, Bd. 1, Hildesheim, 1983. (『哲学一般についての予備的叙説』山本道雄・松家次朗訳、山本道雄「ヴォルフの論理学思想について——『ラテン語論理学』の概念論、判断論、真理論を中心に (2)」所収、『文化學年報』15、神戸大学文学部、1996年、1-169頁)
- PE: ——. *Psychologia empirica*, Frankfurt/Leipzig, 1738(1732), in: *Christiani Wolffii Psychologia empirica*, *Gesammelte Werke*, hrsg. von J. École et al., Abt. 2, Bd. 5, Hildesheim, 1968. (『経験的心理学』)